

<論文題目>

『論語』に関する教育学的考察
—教育目的考察の一視点として—

指導教授 森川 直

岡山大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻 16-001 有元淳一

I. 研究の課題

今年には戦後 60 周年という節目の年を迎える。1947 年、民主的で文化的な国家を建設し、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする憲法の理念の元、教育の基本を確立するために教育基本法が制定された。教育基本法 第 1 条でうたわれている「教育の目的 (Aim of Education)」とは「人格の完成 (the development of personality)」という個人的目的と、「平和的な国家及び社会の形成者 (builders of the peaceful state and society)」という社会的目的が統一された目的である。我が国では、教育基本法成立以来、「人格の完成」という個人的目的と、「平和的な国家及び社会の形成者」という社会的目的とが、いかなる関係にあるのか、どちらが先に達成させるべき目的であるのかが繰り返し問題にされてきた。2003 年の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について⁽¹⁾」では、教育基本法の改正の全体像を踏まえ、新たに規定する理念として、「社会の形成に主体的に参画する『公共』の精神、道徳心、自律心の涵養」や、「日本の伝統・文化の尊重、郷土や国を愛する心と国際社会の一員としての意識の涵養」等の社会的目的を強調しており、賛否両論の激しい議論を巻き起こしている。

現代の教育目的論に欠けている点は、宮澤康人氏が「近代の教育思想」を「西洋に独自の思想である」、「『他ならぬ西洋という基盤においてのみ』現れた、『合理的』に次世代育成をしようとする思想」と定義している通り⁽²⁾、西洋近代教育学の立場だけで教育目的を論じている点である。我が国には我が国の固有の歴史・文化・宗教・言語・習慣等が存在し、教育目的はそれらを踏まえて論じる必要があるのではないかと、また、我が国の教育目的を語るには、西洋近代教育学の立場から考察するだけでは十分とは言えないのではないかと考える。東洋教育思想、特に儒教は日本、中国、韓国など東北アジアを代表する思想である。それは宗教をも超えた深い人間観・教育観に支えられており、古来より東北アジアにおいて政治・経済・宗教・教育・日常生活の在り方に多大な影響を与え続けている。私はこの普遍的教育目的を考察する際に、西洋近代教育学の視点から論ずるだけでなく、我が国に最も影響を与えてきた儒教の見地から考察することを本論文で提案する。

第二次世界大戦後、敗戦という悲惨な事実は、過去の日本・日本人の在り方が悉く誤ったものであったかのような錯覚を起こさせ、我が国の文化・歴史及び、日本人の国民性・信念は無視されがちであった。とかく儒教は民主主義・自由・平等の敵であるかのような扱いを受けてきた。現在においても、儒教に関する思想・思想史、及び『論語』などの古

典の解釈についてなどの人文科学の研究対象として多くの研究がなされてはいるが、儒教の観点に立って現在の教育目的を考察したものは見あたらない。しかし、儒教の倫理観と価値観の一部は現在においてもなお、我々日本人の道德・人間修養の規範となっており、心の底で脈々と生き続けているのである。未来を創造する教育にとって「教育とは何か」、「教育の目指すべきものとは何か」という問いに対して、一つの方向を示してくれるのが、『論語』であると私は確信している。

そこで本研究は、儒教の原書である『論語』を中心に教育的観点から読み深め、「何のために教育は行われるのか、何のために人は学ぶのか(purpose)」について論究すると同時に、『論語』の中に見られる理想の人間像「君子 (aim)」の真の意味を探求する。そして、教育目的を考察する際、儒教の原書である『論語』を顧みることの意義を述べることを本研究の課題とする。

II.論文構成

序 章	第 3 章 君子の道
第 1 節 教育目的を問うこと	第 1 節 仁と孝
第 2 節 本研究の課題と研究方法	第 2 節 知と文
第 1 章 春秋時代と孔子	第 3 節 勇と義
第 1 節 封建制度の解体	第 4 章 『論語』における人間形成論
第 2 節 理想社会を夢見て	第 1 節 孔子の教育観と学問観
第 2 章 理想の人間像「君子」	第 2 節 理想の教師像
第 1 節 儒教における教育目的	終 章
— 『禮記卷第四十二大學』より—	第 1 節 『論語』を顧みる意義
第 2 節 君子と小人	第 2 節 今後の課題

III.論文の概要

(1)「君子」の意味

孔子(魯 紀元前 551?2?-479)の生きた時代は、周王朝(前 11 世紀-256)、春秋時代(前 770-403)の末期である。「この時代は周王朝のもとに天子・諸侯・卿・大夫・士というように身分的な上下の位階が嚴重に定まっていた、封建制度といいならわされる政治的・社会的な組織が次第に解体しつつあり⁽³⁾」、周王朝の權威は地に落ち、国内は百四十余りの大・小国に分立して互いに覇権を競い合った時代である。そして、「侯国内でも内乱がしきりに起こって諸侯の権力はだんだん卿とよばれる国家老の家に奪われ、さらに実権は諸侯から見ると陪臣にあたる、家老の家来の手に移ろうとしていた。国際的には不断の交戦状態がつづき、

国内的には各国に内乱が勃発して、諸侯の弑逆などの不祥事がしきりに起こった⁽⁴⁾」という下克上の時代であった。孔子の生きた時代は、まさに紀元前6世紀から5世紀の、封建制度の解体が最も激しく進行し、無道徳状態に陥った混乱期の真っ直中だったのである。孔子はこの先行き不透明な時代に生を受け、周王朝建国期の、文王・武王・周公旦の精神に返るという理想を掲げて、人々の心を正し、廢れゆく周の禮樂を復興し、社会道徳の再建をはかろうとしたのである。晩年の放浪の旅から魯に帰還した孔子は、自分が成し遂げられなかった理想社会の実現を未来の若者に託すため、仕官を目指す新興士族の同志を集め、仕官するに足る教養・見識・道徳を授けるための教育に力を注ぐようになる。この孔子の学園の目的は「一般士族に對して、道徳的にも教養的にも、國家社會の指導者として高級の官職に任じても適格者である様な訓練を施して、すぐれた君子を養成すること⁽⁵⁾」であったのである。

『論語』の中には孔子が「君子」について言及した章が約70見られる。「君子」とは「もと卿・大夫として指導者の身分に屬する教養豊かな人物を意味し、一般士族やそれが就職して一定の役職に任じた有司等よりも、高級な人物を指す言葉であつたが、孔子は次第に周の身分制度の崩壊に適應して、道徳も教養も高く、國家社會の指導者たるにふさわしい人物⁽⁶⁾」とされる。『論語』の中で語られている「君子」にも、為政者としての「君子」と、理想の人間像としての「君子」の2つの意味がある。しかし、孔子の言う「君子」とは、為政者としてその地位に安住している既成の「君子」ではなく、「教養的」に水準が高く「道徳的」な資質を高度に身につけた、理想の人間としての「君子」であった。孔子の「君子」養成の教育は、ただ「禄を于(ト)める」ための教育、卿・大夫を凌ぐための貴族的・美的教養を修めるための教育ではない。「修己治人」、つまり、自己を修養し、民衆を徳と教によって治めることのできる理想の人間を養成する人格教育であったのである。

後に『禮記卷第四十二大學』において「明明徳（学問修養によって輝かしい徳を身につけて、それを世界に向けて輝かせること）」・「親民（明徳の実践を通して、民衆が親しみ睦み合うようにさせ、世界平和を実現すること）」・「止於至善（学問修養及び実践は、絶えず最高善の境地に踏み止まっていること）」と整理されて説かれる。つまり、儒教における教育目的は、古の時代に世界平和を実現した「聖人」を究極の目標とし、自己の「明徳」を他人にも及ぼして「家」・「国（社会）」・「世界」の平和を実現しようとするところの「君子」を育成することにあつたのである。

儒教の観点に立って教育目的を見ると、「個人」と「社会」、「個人的目的」と「社会的目的」の問題は、決して対立・葛藤を生む問題として捉えられていない。当時の教育目的は為政者（国家・社会の指導者）としての「君子」を育成することであり、為政者たるに相応しい高度な道徳と豊かな教養を身に付けさせることであつたため「個人的目的（修己）」がそのまま「社会的目的（治人）」となつていたのである。寧ろ、儒教における教育目的は、この2つの目的が一体化されたものでなければならなかつたのである。なぜなら当時の「為政者」は、単なる世襲制によって高い身分・地位を与えられていた「君子」と、最高善で

ある「仁」を完全に修得した「聖人」または「仁」の境地に達しようと懸命に努力し続けている「君子」の二通り存在し、孔子が教育目的に掲げた真の「為政者」とは後者の「聖人」・「君子」であったからである。確かに、孔子が掲げた「聖人」・「君子」という教育目的は、理想の「為政者」を目指すということに限定されていた。しかし、現代の教育目的（教育基本法）が「人格の完成」という個人的目的と、「平和的な国家及び社会の形成者」という社会的目的とを統一した教育目的を掲げている以上、たとえいかなる境遇・身分であっても、個人的・社会的道徳の涵養が教育目的の主たる内容となることは明確である。

(2) 君子の道

「子曰。(君子之道者三。我無能焉。)知者不惑。包咸曰。不惑亂。仁者不憂。孔安國曰。無憂患。勇者不懼。(子貢曰。夫子自道也。)」(子罕・憲問 ※ () 内は憲問。憲問では「知者不惑」と「仁者不憂」の順序が逆である。)

(子曰く、(君子の道に三あり、我は能くする無し。)) 知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れずと。(子貢曰く、夫子 自ら道(い)うと。))

【解釈】先生が言われた。「(君子の道は3つある。私には到底できるものではない。) 知者は惑うことがない。仁者は憂えることがない。そして、勇者は懼れることがない」と。(子貢が言った。「これは先生自身のことを言われたのだ」と。)

子罕・憲問篇には「君子」が具えなければならない3つの徳「知」・「仁」・「勇」が示されている。「知者」は惑うことなく正しく判断することができ、「仁者」は憂うことなく心静かであり、「勇者」は懼れることなく果敢に実行することできるとする。「知」・「仁」・「勇」の三徳は「君子」を目指すための根本原理であり、この三者は相互に関連している。

「君子博學於文。約之以禮、亦可以弗畔矣夫。(子曰く、君子博く文を學び、之を約するに禮を以てせば、亦以て畔かざる可きか。)(解釈：君子は博く学問を学び、学問を修める際に禮に従っていれば、道に外れることはない。)(雍也)」、「人而不仁。如禮何。人而不仁。如樂何。(人にして不仁ならば、禮を如何せん。人にして不仁ならば、樂を如何せん。)(解釈：その人が仁でないのならば、禮だの樂だの言ってもどうしようもない。)(八佾)」と説いている通り、「知」は「禮」の実践を通して集約し、道に外れないようにしなければならず、その「禮」は「仁」に基づいていることが解る。

さらに、「仁者必有勇。勇者不必有仁。(仁者必ず勇有り、勇者必ずしも仁有らず。)(解釈：仁者は勇があるが、勇者に仁があるとは限らない。)(憲問)」、「好勇疾貧。亂也。人而不仁。疾之已甚。亂也。(勇を好むも貧を疾(い)めば、亂(みだ)る。人にして不仁なる、之を疾むこと已甚だしきときは、亂る。)(解釈：勇を好む人は、自分の生活の貧困なことに不満であれば、反乱を起こす。人の不仁の行いを見れば不満に思い、騒乱となる。)(泰伯)」と述べられており、「勇」は「仁」に基づかなければ「亂」になってしまうのである。

「仁」は孔子の目指した最高の道徳であり、最も根源的な徳性である。「知」や「勇」、「禮樂」などの学問も、最高の徳性である「仁」の一つの表れであり、「仁」を実現する一つの手段にすぎない。「君子去仁。悪乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是。顛沛必於是。」（君子は仁を去らば、悪くにか名を成さん。君子は終食の間も仁に違うこと無く、造次にも必ず是に於いてし、顛沛にも必ず是に於いてす。）（解釈：君子が仁の徳を離れて、どこに名を成すことができようか。どこにも名を成すことができない。君子は食事を摂る間、忙しい時、躓き倒れそうな時にでも必ず仁の徳に従って行動するものだ。）（里仁）」とあるように、「君子」は食事をする間、躓き転びそうになる時など、いかなる瞬間においても「仁」を忘れてはならない。「君子」がこの世に生きる目的はただこの「仁」を実現することである。

しかし、孔子は「君子而不仁者有矣夫。未有小人而仁者也。」（君子にして不仁なる者有らんか。未だ小人にして仁なる者有らざるなり。）（解釈：君子であっても仁の境地に達していない人はいるだろうね。しかし、小人であっても仁を修得している人はいない。）（憲問）」と説いている。「君子」と称される人間であっても、全ての「君子」が完全に「仁」を修得しているとは限らない。当時、為政者としての「君子」が、世襲的に高い身分にあり、権力の座に居て政治を司っていたと考えるならば、完全なる「仁」を修得していない「君子」も存在することは疑問の余地がない。

したがって、真の「君子」とは「仁」を追求し続け、完全に「仁」の境地に達していない未完成の「君子」を指しているものと考えられる。「君子」は「仁者」であるべきであるが、「仁」は最高の道徳であり、完全な「仁」の境地に達しえないのが現実なのである。つまり、君子の君子たる所以は「仁」を修得しようと懸命に追い求め、努力精進し続けている人間のことであり、「君子」は「仁者」であると結論づけることができる。

（3）『論語』を顧みる意義

2500年前の春秋時代の状況は、政争・戦争・権力・謀殺・謀反・差別・嫉妬・偏見など、現代社会と酷似しており、いつの時代、いつの人間にも通じて抱える問題を映し出していることに気が付くことができる。それは文明・科学技術の発展によって、我々の生活は文化的・経済的に非常に豊かになってきたにも関わらず、人間の心や精神は全く進歩してきていないことを示すことでもある。『論語』は、教育目的である「君子」、その「君子」が修得すべき徳について言及した章が数多く散りばめられ、わずか数文字という非常に短い文章で、かつ、人間の心の真理を的確に表現している。価値多元化社会と称される現代において、何が人間の修得すべき価値であるのか、今一度、『論語』を見直す時ではないだろうか。『論語』という古典を通じて、その中身をしっかりと吟味し、我々が生きていく日々の生活においてはもちろんのこと、自分の心の問題、家族との関わり、社会における人間関係、世界についての見方、運命に対する在り方などから、現代的意義を見出し、生きた智慧としてその意味を読み取り、生かしていかなければならないと考える。

現行の学習指導要領 第3章 道徳の目標には「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」とあり、この「道徳的心情」・「道徳的判断力」・「道徳的実践意欲と態度」とは、まさに『論語』で説かれている「君子」の修得すべき「仁」・「知」・「勇」の三徳を示している。孔子の説く真の「君子」とは、人間を愛し、善を行うことを喜び、悪を憎むという誠実で素直な感情を根底に持ち、学問を修めて、人間としてのより良い生き方・在り方・考え方を学び、道徳的価値を自分の内面から自覚する。そして、その道徳的価値を実現するための適切な実践方法を学問によって獲得した知識を基に総合的に判断し、強い意志によって道徳的価値を実現する人間である、と解釈することができる。

かつて顔淵が言った。「**仰之彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。夫子循循然。善誘人。博我以文。約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之。末由也已。**」(之を仰げば彌(ヨイ)高く、之を鑽(キ)れば彌堅し。之を瞻(シ)れば前に在り、忽焉(コツヱ)として後ろに在り。夫子 循循然(ジュンジュンゼン)として、善く人を誘う。我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんと欲すれども能わず。既に吾が才を竭くせば、立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従わんと欲すと雖も、由る末きのみ。) (解釈：先生を仰ぎ見れば見るほどますます高く、堅い岩石に穴をあけようと切り込めば切り込むほどますます堅い。前にいらっしゃるかと思えば、もう後にいらっしゃって捉えることができない。先生は順序を踏んで善導して下さる。学芸をもって知識を広めて下さり、その実践として禮を教えて下さる。学問を辞めようと思っても先生が教えて下さる学問の魅力に負けて辞めることができない。私は自分の全てを尽くして学び実践してきたので、先生の在り方がしっかりと目の前に見える。それに従っていけばよいのだが、それでも私は到底及ばない。) (子罕)」と。何のために教育は行われるのか。それは現在まで受け継がれてきた文化を伝達するだけでなく、理想の人間像を具体的に提示し、教育者もそれに向かって一心に邁進する姿を見せることによって、学習者自身の道徳的価値を自覚・理解させ、より善く生きようとする力を引き出すためである。彼らが道の途中で躓き、悩み、倒れそうになっている時に、同じ道を志す人間として、そっと彼らの傍に寄り添い、励まし、勇気を奮い起こさせるためである。そして、いつの日か世界に平和をもたらせる、という大志を未来に語り継ぐためである。

かつて曾子が言った。「**士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。**」(士は以て弘毅ならざるべからず。任 重くして道 遠し。仁 以て己(オノ)が任と爲す。亦 重からずや。死して後 已(ヤ)む。亦 遠からずや。) (解釈：人の道を求める志のある者は、大らかで強い人間でなければならない。道徳的価値の実現という任務は重く、世界平和という道のりは果てしなく遠いものだからである。道徳的価値を実現させることを己の任務とする。なんと重いことか。それが一生続いていく。なんと遠いことか。) (泰伯)」と。何のために人は学ぶのか。それは道徳的価値を実現するという使命を負って、終わりのない果てしなく続く道を己の人生をかけて歩みながら、自分の道徳的価値を実現させるためである。そして、己の道徳的価値の実現だけでなく、家族をはじめ、親族・地域社会・国家・世界の人々の道徳的価値をも実現させ、世界平和という究極の目的を成し遂げるためである。

-
- (1) 解説教育六法編修委員会篇『解説教育六法 平成16年度版』、三省堂、2004年、p918-919。
 - (2) 宮澤康人篇『近代の教育思想』、放送大学教育振興会、1993年、p22-23。
 - (3) 貝塚茂樹著『孔子』、岩波新書、1977年、p16-17。
 - (4) 同上、p16。
 - (5) 木村英一著『孔子と論語』、創文社、1971年、p144。
 - (6) 同上。

IV.参考文献

- ・ 何晏『論語何氏等集解』、臺灣中華書局聚。
- ・ 朱熹『四書集注』、臺灣中華書局聚。
- ・ 十三經注疏整理委員會『論語注疏』、北京大學出版社、2000年。
- ・ 司馬遷『史記』、臺灣中華書局聚。
- ・ 左丘明『春秋左氏傳杜氏集解』、臺灣中華書局聚。
- ・ 鄭玄『禮記正義』、臺灣中華書局聚。
- ・ 加地伸行訳注『論語』、講談社、2004年。
- ・ 金谷治訳注『論語』、岩波書店、1999年。
- ・ 吉川幸次郎著『論語 新訂中国古典選第3巻』、朝日新聞社、1966年。
- ・ 貝塚茂樹著『論語』、講談社、1964年。
- ・ 小川環樹訳注『論語微』、平凡社、1994年。
- ・ 貝塚茂樹編『伊藤仁斎』、中央公論社、1972年。
- ・ 小倉芳彦訳『春秋左氏伝』、岩波書店、1989年。
- ・ 小川珠樹他訳『史記世家』、岩波書店、1982年。
- ・ 小川珠樹他訳『史記列伝』、岩波書店、1975年。
- ・ 西野広祥他訳『史記VII 思想の命運』、徳間書店、1988年。
- ・ 金谷治訳注『大学・中庸』、岩波書店、1998年。
- ・ 武内義雄譯註『學記・大學』、岩波書店、1943年。
- ・ 島田虔次著『大学・中庸』、朝日新聞社、1967年。
- ・ 赤塚忠著『大学・中庸 新釈漢文大系』、明治書院、1967年。
- ・ 竹内照夫著『礼記 新釈漢文大系』、明治書院、1971年。
- ・ 宇野精一著『小学 新釈漢文大系』、明治書院、1965年。
- ・ 近藤康信著『伝習録』、明治書院、2004年。
- ・ 木村英一著『孔子と論語』、創文社、1971年。
- ・ 木村英一著『中国哲学の探究』、創文社、1981年。

- ・ 加地伸行著『孔子 時を越えて新しく』、集英社、1984年。
- ・ 加地伸行著『儒教とは何か』、中央公論新社、1990年。
- ・ 加地伸行著『<教養>は死んだか』、PHP新書、2001年。
- ・ 貝塚茂樹著『孔子』、岩波新書、1977年。
- ・ 貝塚茂樹著『諸子百家』、岩波書店、1961年。
- ・ 江連隆著『論語と孔子の事典』、大修館書店、1996年。
- ・ 狩野直禎「『論語』のすすめ」、『月刊しにか(10号)』、大修館書店、2002年。
- ・ 荒川絃「儒教教育の日本的展開」、『人文論集』第55巻、静岡大学人文学部、2004年。
- ・ 高峰文義「『論語』に見られる教育の理想像 ―君子について―」、『福岡大学人文論叢』、福岡大学研究所、1980-1982年。
- ・ 山崎純一「孔子と教育―『論語』に見える孔子教学集団の教育目的と主たる教育方法」、『櫻美林大學中國文學論叢』第11号、1986年。
- ・ 森嶋通夫「転換期における日本の教育」、『教育の課題』、岩波書店、1990年。
- ・ 武内義雄著『論語之研究』、岩波書店、1939年。
- ・ 洪祖頤著『儒家教育思想の研究』、高陵社書店、1978年。
- ・ 和田利彦編『論語の文献・註釋書』、春陽堂書店、1937年。
- ・ 王家驊著『日中儒学の比較』、六興出版、1988年。
- ・ 林復生著『孔子新伝 「論語」の新しい読み方』、新潮社、1983年。
- ・ 戸川芳郎他著『儒教史』、山川出版社、1987年。
- ・ 瀬尾邦雄編『孔子・孟子に関する文献目録』、白帝社、1992年。
- ・ 俵木浩太郎著『孔子と教育』、みみず書房、1990年。
- ・ 諸橋轍次著『論語人物考』、春陽堂書店、1937年。
- ・ 赤塚忠著『中国古代思想史研究(赤塚忠著作集 第2巻)』、研文社、1987年。
- ・ 赤塚忠著『儒家思想研究(赤塚忠著作集 第3巻)』、研文社、1986年。
- ・ 矢内原忠雄訳「武士道」、『新渡戸稲造全集 第一巻』、教文館、1969年。
- ・ 新渡戸稲造著・奈良本辰也訳『武士道』、三笠書房、1989年。
- ・ 中根千枝著『家族を中心とした人間関係』、講談社、1977年。
- ・ 孔健著『わが祖・孔子と「論語」のこころ』、日本文芸社、1990年。
- ・ 井上靖『孔子』、新潮社、1995年。
- ・ 下村湖人『論語物語』、講談社、1981年。
- ・ 原聡介「教育目的論の構築への期待 ―拙論に対する批判に答えながら―」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年。
- ・ 原聡介「教育目的論・再論と再々論」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 宮寺晃夫「近代教育学における『目的論』の位置」、『近代教育フォーラム』創刊号、1992年。

- ・ 宮寺晃夫「教育目的論の可能性—教育目的の正当化論を求めて—」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年。
- ・ 宮寺晃夫「教育可能性論か教育目的論か —教育思想史の二つの視角—」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 新井保幸「教育目的の概念と教育目的論の課題」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 金子茂「近代教育思想史研究と「教育可能性」概念の史的解明」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年。
- ・ 毛利陽太郎「「教育可能性概念の展開」をめぐって —戦後教育思想の再検討に向けて—」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年。
- ・ 松浦良充「教育目的論の必要性和可能性そして限界」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年。
- ・ 桜井佳樹「近代教育(学)批判と教育目的論」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 金子茂「教育学の基底への問 —相互理解の困難さとその克服への摸索—」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 丸山恭司「教育目的論と行為理解の近代化偏向をめぐって」、『近代教育フォーラム』第4号、1995年。
- ・ 宮澤康人編『近代の教育思想』、放送大学教育振興会、1993年。
- ・ ライシャワー著・國弘正雄訳『ザ・ジャパニーズ』、文藝春秋、1979年。
- ・ ルソー著・今野一雄訳『エミール』、岩波書店、1962年。
- ・ J.デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育』、岩波書店、1975年。
- ・ 解説教育六法編修委員会編『解説教育六法 平成16年版』、三省堂、2004年。
- ・ W.ブレチンカ著、岡田渥美・山崎高哉監訳『価値多様化時代の教育』、玉川大学出版部、1992年。
- ・ 鈴木英一編『教育基本法の制定（教育基本法文献選集1）』、学陽書房、1977年。
- ・ 稲富栄次郎著『近代日本の教育思想（稲富栄次郎著作集7）』、学苑社、1978年。
- ・ 山崎高哉「価値多元化社会における教育の目的」、『教育学研究』第64巻、1997年。
- ・ 中村清「人格の完成をめざす教育の意味」、『教育学研究』第65巻、1998年。
- ・ 沼田裕之著『教育目的の比較文化的考察』、玉川大学出版部、1995年。
- ・ 田浦武雄著『教育的価値論』、福村出版、1967年。
- ・ 廣松渉 他編『哲学・思想事典』、岩波書店、1998年。
- ・ 長澤規矩也 他編『新明解 漢和辞典（第四版）』、三省堂、1992年。